HITA PRIDE PROJECT

日田下駄職人

日田市三芳小渕町

本野 雅幸〈35〉

自分に合う職が見つかるまで、焦らずマイペースに探せ

MASAYUKI MOTONO

1981年生まれ。日田林工高卒。日田へ戻り、医療事務や市の臨時職員などを経て家業を継ぎ、下駄職人に。父、母、妻と4人で「本野はきもの工業」を営む。布を貼りコーティングした「布あそび下駄」や、かかとの高い「ひーる下駄」など魅力的なデザインで話題を呼び、リピーターを増やしている。「下駄王子」の異名を持つ。

職人として日田下駄を作る傍ら、下駄のPRにも力を入れる。下駄の材料「木地」のやすりがけや、焼いて磨くことで木目を浮き上がらせる工程を主に担当しながら、完成品を県内外の物産展や観光イベントへ出品する。

日田で生まれ育ち、福岡市の専門学校に進学してパソコンや情報ビジネスについて学んだが、卒業後はすぐに日田に戻った。「地元が好きだった。日田に学校があれば出て行かなかったんだけどね」。戻った当初は家業を継ぐ意志もなく、5年ほどは医療事務など別の職に。「ライフスタイルの変化や輸入品に押されて下駄が売れなくなっていて。両親は店をやめるつもりだったと聞きました」。しかし自然と店を手伝うようになり、25歳で「3代目」を名乗った。

決めたきっかけを「まだ可能性があると分かったのが大きいかな」と振り返る。手伝いを始めたころ、客に話を聞いてもらおうと「奇抜な商品なら足を止めてもらえるかも」とエアブラシでカラフルに装飾した下駄を製作。狙いは当たり、少しずつ足を止める人やメディアの取材が増えた。「やり方を考えれば、まだ日田下駄はいける」と面白さを感じた。その後も客の意見や要望を取り入れながら新商品を次々と開発。「履きやすい」「下駄の概念が変わった」と評判だという。「お客さんとの距離が近いので、商品への反応がすぐ分かる」と仕事のやりがいを語る。「日田下駄を喜んでもらえて、知名度も上がりつつあると思う。うれしいです」

ほどよい田舎であり、マイペースに生活ができる日田が好きだ。一方で「いい資源があるのに情報発信が少なく、良さが伝わっていないのがもったいない」という思いもある。日田下駄で踊るダンスチーム「日田もりあ下駄い」の設立に携わり、市内の情報をネット配信する「ALL BY 日田」の代表も務めるなど、地域おこし活動にも取り組む。

中高生へ「自分に合う職が見つかるまで、焦らずマイペースに探せばいい」とエールを送る。「一度都会を見るのもいい。自分の生まれ故郷と見比べて、どっちか合ってる方を選べばいいと思う。こればっかりは、やってみないと分からないからね」